

令和4年9月12日

南の風特集プラスI 恩塚 HC の目指すもの

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

アカツキジャパン女子日本代表特集号は終了しました。ここでプラス1として、恩塚 HC が目指すもの、さらに言えば日本のバスケットボール界に残そうとしているものについて書きます。

恩塚 HC が女子日本代表のヘッドコーチに就任して一年が経ちます。東京オリンピック銀メダルという偉業を達成したチームを引き継ぐことにプレッシャーはなかったのだろうか・・・

彼は就任時に次のように語りました。

「プレッシャーはあると言えませんが、ないと言えない。コップの水じゃないですけど、物事のどっちを見るかだと思っています。僕はこれはすばらしい志をもった選手やスタッフたちと、金メダルに向けて挑戦できる素晴らしい機会だと考えています。僕たちが挑戦する姿を示し、あるいは挑戦で得たものを日本のバスケット界に残すことができ、それで私もやってみようという人が増えていく。そのことへのチャレンジのすばらしさを考えたら、僕を感じるプレッシャーなどたいした問題じゃないです。」

トム・ホーバス HC がやっていたことの中には、恩塚 HC が今のコーチングで大事に思っていることがあった。トム・ホーバス氏が女子代表 HC になったときに『オリンピックで金メダルを取る』と目標を掲げた、そのマインドセットだ。

「これまで一度もメダルを獲得したことがないことや、身長が低いことなどを理由に自分たちを差し引く（過小評価する）ことなく、最高の目標を掲げたことで、選手たちの潜在意識が変わったと考えています。だから絶対自分を差し引かないこと。なりたい自分を目指す。過去どんなだったかとかではなく、金メダルを取るんだってというマインドセット、目標設定は引き継いでいきたいと思います」

このことは、今の恩塚 HC のコーチングでも重要な柱のひとつになっています。逆にホーバス HC との違いを聞かれたときに、恩塚 HC は次のように答えました。

「トムさんはナンバープレーが多かったんですけど、僕は原則を軸にして、選手がその状況に即応していく軽やかな速さを武器にします」

東京オリンピックの時点で、ホーバスジャパンにはナンバープレー（フォーメーション）が100以上あったと言われています。（アカツキジャパン女子日本代表特集号Iにも書きました）大会後に選手たちが「覚えるのに大変だった」と口々に言っていたほどでした。恩塚 HC はナンバープレーのかわりに、チームの共通認識としての『原則』を設定し、その先の判断を選手たちに任せようとしています。

「例えばですけど、原則の設定のレギュラー的な切り口が3つ4つあって、それに対応されたときのカウンタープレーを次から次へと展開していくという戦略ですね。選手の判断力を高めて、その判断力にチームがシンクロできるようにして、相手につかまらない、相手をつかまえる戦いをすることです」

そのやり方で目指したいのは、「常識あるバスケット人を育てる」ことだと言います。

ここで恩塚 HC がいう常識とは、試合をする上での基本原則や、共通認識と言うことです。それを理解し、その先は場面に応じて判断を下せるような選手を育てていきたいのだと言います。

次号では、恩塚 HC が根付かせたい常識についてもう少し深掘りします。